

## 新潟県燕温泉の発展過程に関する研究

油井正昭・木下晴雄・古谷勝則（千葉大学園芸学部）

温泉地、観光レクリエーション、変遷、新潟県、燕温泉

## 1. 研究の目的

近年全国各地に大規模なリゾート開発が計画され、地域振興の期待のもとで事業が推進されつつあるが、わが国には、小規模ながら昔ながらのリゾートとして、国民に親しまれてきた場所がある。その一つは湯治場として賑わってきた温泉地であり、この研究では、今日でも豊かな自然環境が維持され、歡樂的要素が少なく、湯治場的色彩の濃い新潟県中頸城郡妙高村にある燕温泉を対象に、その変遷を追い、温泉地の特徴が時代とともにどのような過程を経て今日の状態になったかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究の方法

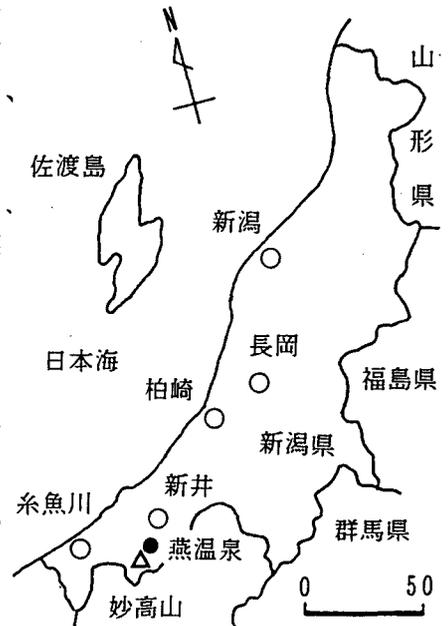
燕温泉の変遷は、文献調査、地図類の分析を行うとともに、現地に滞在し集落の変化を直接居住者から聞き取り、同時にその変化の状況が今日まで持続しているものは確認し、必要なものは計測を行った。こうした作業で得た燕温泉の変遷については、生活構造、施設（日常生活施設と観光レクリエーション施設）と土地利用状況、利用形態（温泉、登山・スキー）などに分類し、各項目における特徴を明確にする。また、各項目間の特徴、変遷全体の特徴を考察する。

## 3. 対象地の概要

燕温泉は、第1図のとおり新潟県南西部にあり、妙高山（2446m）中腹の標高1100mの位置に存在する孤立した集落（麓の町の関山との距離約10km、標高差700m）である。冬季は積雪が4～5mにもなる豪雪地であり、夏は冷涼で25度を超えない。温泉地全体が国有地である。上信越高原国立公園の第2種、第3種特別地域に指定されていて、自然環境に恵まれた温泉地である。妙高山の表登山口としての役割を果たし、豪雪地であることを生かして古くからスキー場を開設している。利用者を受け入れるのは、8軒の旅館と2軒の土産物屋からなる100%第3次産業に依存している集落である。

## 4. 変遷の特徴

燕温泉の発祥は、明治4年（1871）に温泉が湧出している場所に浴槽が作られたことに始まった。明治8年から夏期のみ人が住むようになり集落の形成を見たが、明治26年（1893）頃山崩れに合い、明治28年（1895）に山崩れの場所を離れて現在地に移転した。したがって、現在の燕温泉は、明治28年以降に建設された集落であり、約100年前に何もなかった土地に集落がつけられ今日に至っている。燕温泉の発展過程をみると、生活する人々の生活構造の変化をはじめ、生活施設の充実や観光レク



第1図 燕温泉位置図

リエーション施設（以下「利用施設」という）整備、温泉利用など利用の変遷等さまざまな要素がみられるので、以下項目をたてて述べる。

### 1) 生活構造の変遷

生活構造の変遷を年表にし、その年表を基に温泉地への定住、住民の移動、生活形態、交通の変化などを基準に変遷過程を4期に区分した。初めて温泉地に居住するようになったのが第1期である。第2期は明治36年（1903）から昭和35年（1960）までの57年間で、この期間は孤立集落の時代である。第3期は昭和36年（1961）から63年（1988）までで、この時期は交通網の改善で外部との関係が強まり、燕温泉の歴史の中では変化の激しい時期である。第4期は自動車道が通年確保され、孤立が解消され、麓の関山などとのつながりが強化されつつある。

### 2) 施設及び土地利用の変遷

燕温泉とその周辺地域は国有地（国有林）であることと、急峻な地形のために今日まで大規模な開発は行われなかった。しかし、燕温泉の集落は当初約1haであったが、徐々に拡大して平成3年（1990）現在約4haに広がっている。また、観光レクリエーション利用空間は、集落を中心に緩傾斜の土地を求めて外側に拡大してきた。

#### (1) 生活施設の変遷

生活施設の整備充実の過程は5期に区分できる。第1期は住宅を建て住居の確保を行った時代。第2期は大正10年（1921）から昭和14年（1939）にかけて水道、電気、電話など生活基盤の施設整備が進められた時代。仮住いの気持で生活してきた傾向が永住の方向へ進んだ。第3期は昭和15年（1940）から29年（1954）までで、第2次世界大戦の影響などで生活施設の増設がなく停滞の時代。第4期は昭和30年（1965）から44年（1969）までで営林署や新潟県により雪崩防止施設、砂防施設、河川の護岸整備、道路建設など災害対策や道路整備が行われた。道路整備により孤立した集落事情が解消されるという大きな変化が起きた時代。第5期は昭和45年以降で生活施設の充実が図られつつある。

#### (2) 利用施設の変遷

利用施設の変遷は6期に区分した。第1期は温泉浴場、旅館など温泉地の基本的施設が作られた時期である。第2期は旅館の移転新築、各旅館が内湯を設け、雪崩の被害を避ける目的で引湯管が川底に埋設されるなど、初期の施設の改善が図られた。第3期はほとんど手が加えられなかった。第4期は昭和31年（1956）から39年（1964）が該当する。昭和31年に上信越高原国立公園に指定されたことと、この頃から登山、スキーなど自然志向のレクリエーションが急速に普及したことを反映し、妙高山への新登山道開設、スキーリフト建設、集落内に2カ所の駐車場建設が相次ぎ、従前温泉施設の整備が中心を占めていた状況が大きく変化した。登山・スキー関係の施設が整備され、利用者層の変化をみた。登山道開設は営林署が、駐車場建設は妙高村が実施した。初めて公共事業で利用施設が充実したのがこの時期の特徴で、国立公園指定による効果といえる。第5期は昭和40年（1965）から50年（1975）の間で、利用者層の変化に合わせ、各戸が収益を高めるために旅館を改築した。第6期は昭和51年（1976）以降現在も続いており、スキーゲレンデ整備、ペアリフト設置などスキー場施設の充実や、吊り橋が国立公園事業で建設されたり、ゲレンデ整備で出た岩石を用いて露天風呂を造るなど、利用施設の整備をとおして魅力向上を図る努力を行っており、利用者誘致のための積極姿勢をとっている特徴がみられる。

#### 4) 利用形態の変遷

##### (1) 温泉利用の変遷

温泉利用の変遷は4期に区分できる。第1期は1870年以前の温泉の薬効を求めて自然のままに利用していた時代。第2期は温泉集落が形成され、周辺農村の人々による長期滞在の湯治が定着した。山間の孤立集落であり、食糧を持参して自炊しなければならないので利用者は限定されていた。昭和35年(1960)以降の第3期は車道が開通し旅行客が来訪するようになった。第4期は平成2年以降を位置づけた。妙高トンネルの開通で冬期間も交通が確保され、一段と利用が便利になり、以前のような素朴さが薄れてきたが、歓楽的要素が無い湯治場の性格は残されている。

##### (2) 登山・スキー利用の変遷

登山・スキー利用の変遷は4期に区分できる。西暦708年に開山されて以来妙高山は信仰の対象となり、燕温泉は信仰登山者の休憩地であり、この時期を第1期とした。第2期は明治末頃から昭和35年(1960)までで、山岳スキーと妙高山へのスポーツ登山が行われてきたことに代表される時期である。第3期は昭和35年に赤倉温泉止まりであったバスが、燕温泉まで入るようになったため、登山基地として利用されはじめ、昭和41年(1966)には山開き登山会が始まるなど、登山休憩地から登山起点へと性格が変化した。スキー利用は冬期の交通便が悪い上にゲレンデ規模が小さく、利用者を引き付ける魅力に欠け、利用者の足は遠のいたのが実状であった。

#### 5. 結果と考察

##### 1) 時代区分にみられる特徴

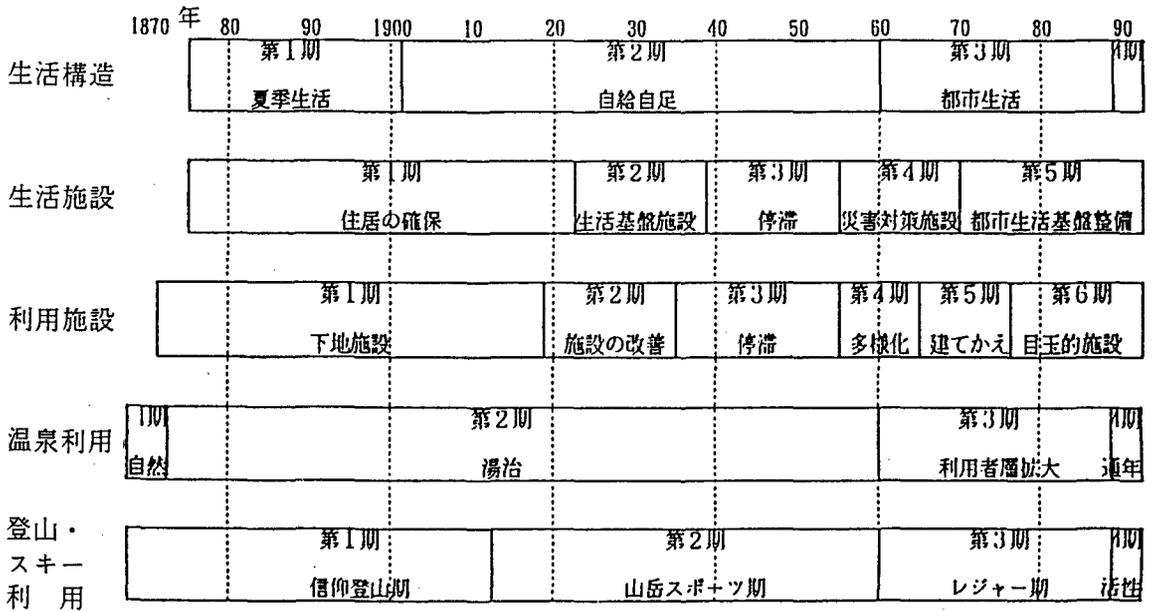
燕温泉の発展過程を住民の生活構造、生活施設、利用施設、温泉利用、登山・スキー利用の各項目別に明らかにしてきた。各項目の変遷に対し時期区分を行ったので、それをまとめ第2図とした。第2図を見ると、温泉の発見から集落形成までは、まず泉源での温泉利用が始まり、その後旅館が建てられてサービス業の生活が始まっており、「利用→利用施設→生活」という順序で発展した自然発生型の温泉地である。集落形成以後の住民生活は、利用者へのサービス業で支えられているため、「生活の向上を目指し→利用を促進させる施設整備→生活施設の整備→生活の向上」という図式が繰り返されている。

利用施設と利用に関して見ると、1960年頃までは利用が先行していて、利用実態を踏まえた形で施設がつくられる「利用→利用施設」だったが、その後「利用施設の整備→利用」と順序が逆になっている。

「生活構造、生活施設、利用施設」の3項目と「温泉利用、登山・スキー利用」の2項目を比較すると、一時期の長さが前者は短く時期区分が多くなったのに対し、後者は一時期が長く時期区分の数が少なかった。これは前者が山間に孤立して自給自足的性格が強い燕温泉の独自性が出ているのに対し、後者は社会一般の動向が影響をしていることによると考えられ、その違いが期の長さに現れていると思われる。

##### 2) 空間の広がりを見る特徴

温泉集落とその周辺地域を見ると、10戸で形成する集落を中心に日常生活空間が成立している。生活空間に続く東・西・南の3方は、スキー場や散策利用の利用空間が自然状態の土地と混在しながら広がり、その外側は自然空間になっている。北側は太田切川の谷がなっていて、開発されずに自然状態である。生活空間と利用空間との間に自然空間が存



第2図 発展過程の時期区分

在する構成が、豊かな自然に囲まれている温泉地としての立地特性である。

住民の日常生活行動は、行政的には妙高村に位置する関係で、同村内の関温泉や関山方面に広がっているが、観光レクリエーション面、特にスキーは東京、名古屋、大阪方面からの交通便や地形関係が影響し、赤倉方面との関係が深くなっており、関温泉方面には広がらない特徴がある。日常生活行動と温泉地としての観光産業上の行動とでは、住民の行動圏が異なるという特異性を見せている。

### 3) 孤立の解消とその影響

通年道路が通行できるようになり、自給自足の崩壊、都市的生活の流入などさまざまな影響が出ている。具体的には、住民の変化では①物資の調達が可能になり生活が便利になった、②親子と一緒に生活できるようになった、③自然と共生してきた生活が崩れる傾向にある、④住民間の強力な協力体制が崩れ、地域内のつながりが弱まってきた、⑤利用者とのつながりが事務的になりつつある、などがある。また、利用者側の変化では①利用者層広がった、②サービス面が向上した、③宿泊単価が上がり長期滞在が難しくなりつつある、④施設依存型の利用者が増加している、⑤利用者間、利用者と住民とのコミュニケーションの減少が目立つ、また共同作業も減少した、などが指摘できる。

指摘したなかで、住民間の協力体制が崩れてきていることと、利用者と住民とが助け合って発展させてきた行動やコミュニケーションが減少してきていることは、将来を考える上での問題点である。外部の影響が強い今日とはいえ、独自に育んできた住民間の協力体制や利用者達とのつながりを維持し、長期滞在のできる温泉リゾートの性格を伸ばすべきと考える。